

平成21年 6月 5日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18730437
 研究課題名（和文） 箱庭制作過程における身体感覚およびイメージの体験に関する研究
 研究課題名（英文） A Study of Body Sense and Imagery Experiencing in the Process of Sandplay
 研究代表者
 和田 竜太（WADA RYUTA）
 京都大学・カウンセリングセンター・講師
 研究者番号：20402951

研究成果の概要：本研究は、箱庭制作過程における体験について、特に身体感覚とイメージの体験を取り上げて検討を行ったものである。本研究を通じて、感覚的かつ動的な体験を捉えるために「擬態語」を用いた手法を新たに開発し、より身体感覚に近い形で表現し捉え直すことで、時に捉えどころのない、あるいは言語化することが困難である「制作者の体験」について、五感を含めた身体感覚をベースとした「体験」としてアプローチし得る可能性を示した。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2006年度 | 700,000 | 0 | 700,000 |
| 2007年度 | 400,000 | 0 | 400,000 |
| 2008年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,600,000 | 150,000 | 1,750,000 |

研究分野：心理臨床学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：箱庭、箱庭制作過程、身体感覚、イメージ体験

1. 研究開始当初の背景

(1)箱庭療法は、河合隼雄によって日本に導入されて以来、心理臨床の場において広く用いられ、発展を続けている。そこでは一貫して制作者と見守り手（セラピスト）との関係性が重視され、“自由であると同時に保護された空間”の中で制作者の世界が表現され展開していく過程にその治療的な基盤があるとされている。実際の心理臨床場面において箱庭が用いられる際には、一回一回の制作の場の中で自らの気持ちや感覚、イメージなどを含めた独自の世界を、制作者・セラピストそれぞれがいかに体験しているのか、箱庭制作の過程の中でそうした体験を理解してい

こうとする視点が非常に重要である。特に箱庭療法は砂という触覚に働きかける素材を用いる点に大きな特徴があり、視覚のみならず触感のような感覚の要素も併せ持った技法として、心身両側面からの働きかけが可能となる。この点に関して、砂からの直接的な感覚だけでなく、箱庭制作を通じたイメージの表現によって、より制作者の内的な感覚としての身体感覚やイメージの広がりや体験されるものと思われる。しかし、これまでの箱庭療法に関する研究においては、表現された内容（箱庭作品）を系列的に捉えることによってその展開を辿るという視点で検討を行っているものが多く、箱庭制作過程におけ

る「制作者の体験」という視点からの研究は未だに少ないのが現状である。本研究では、箱庭制作場面を取り上げ、その過程における体験について、特に身体感覚とイメージの体験に焦点を当てて検討を行うものである。

(2)箱庭制作過程における体験について検討するに際して、時に捉えどころがなく言語化が困難なそうした体験にいかに対応するかが大きな課題となることが予想される。そこで、本研究では、日本語特有の表現形態であり、五感あるいは声や音に由来する「擬態語」(擬音語を含む)を取り上げ、擬態語を用いて箱庭制作過程における「制作者の体験」を捉える手法を新たに開発し、その手法を用いることで身体感覚やイメージの体験といった感覚的・動的な体験にアプローチすることを主眼とする。

2. 研究の目的

(1)箱庭制作過程における「制作者の体験」について、特に身体感覚とイメージの体験に焦点を当てて検討を行う。

(2)感覚的かつ動的な体験を捉える手法として「擬態語」を取り上げ、その精緻化を試みることを通して、箱庭制作過程における「制作者の体験」を捉える新たな手法の開発を行う。

(3)箱庭制作過程における体験の検討を通して、箱庭療法および心理療法の過程やそのありようについて広く検討を行う。

3. 研究の方法

(1)箱庭制作過程における「制作者の体験」を捉えるための「擬態語」を用いた手法の開発

擬態語(および擬音語)について、一般に広く認知され、多くの人が共通の意味として共有することができる形として通用している語の収集を行った。

で収集した擬態語について、それらを意味内容で分類した上で、大学生および大学院生10名に(擬態語抽出のための)予備調査を行い、箱庭制作過程における「制作者の体験」を捉えるための擬態語の抽出を行った。

箱庭制作および抽出された擬態語を用いた振り返りを含めた予備調査を行い、本調査を行う際に使用する擬態語を用いた手法の精緻化を行い、それをもとに箱庭制作過程における「制作者の体験」を捉える手法の開発を行った。

(2)調査方法

調査対象者(制作者):本調査に協力することに同意したA大学の大学生および大学院生計26名(男性13名、女性13名)を対象として調査を行った。平均年齢は男性22.6歳(SD=3.5、18-29歳)女性19.5歳(SD=1.0、18-22歳)であった。

調査者および立会者:研究代表者が調査者および立会者となり、制作への立ち会い、制作後のインタビューの全てを行った。

調査場所:箱庭療法用具一式が揃った面接室(同一部屋)にて調査を行った。

用具:箱庭療法用具一式は、調査のために用いた面接室に備えられているものを用いた。砂箱は、内側が水色に塗られた57cm×72cm×7cmの木箱に、約1.5cmの深さで細かな乾いた砂が入っており、高さ約70cmの台の上に置かれていた。ミニチュア玩具は、人間類、動物類、植物類、建物類、乗り物類、石、貝殻、ビー玉、モール、綿などがあり、棚に大体種類ごとに並べられていた。砂箱は、できるだけ全方向から作れることと棚や壁との間隔を考慮して、それぞれの棚や壁から30cm~90cmほど離して設置した。

手続き:調査は制作者ごとに個別の面接法で行った。まず、箱庭への導入も兼ねて、緊張感を解すことを心掛けながら、調査協力者に氏名・年齢・所属・学年・箱庭制作経験の有無などについて尋ねる用紙に記入してもらい確認を行った。その後、「ここにあるミニチュアを使って、この箱の中に自分の好きなものを自由につけてください。特に時間制限はありませんので、自分で“できた”と思うまでつけてください」という教示を与え、箱庭制作を実施した。調査者は砂箱から約1.5m離れた制作の様子全体を見渡すことができる場所に座って制作を見守った。初発時間および制作時間はストップウォッチで計測し、できるだけ制作者に配慮しながら、記録用紙に初発時間・制作時間・最初に置かれたミニチュア玩具・制作過程・調査者が感じたことなどについて記録を行った。また、ビデオカメラでの撮影について制作者から了承が得られた場合には、部屋の端方に三脚で固定したビデオカメラで撮影を行った。箱庭制作後、箱庭制作の前後および最中に感じられたことについて振り返るために、「箱庭制作前」「制作中」「制作後」のそれぞれにおいて感じられたことについて尋ねる質問紙への記入を求め、それをもとに簡単なインタビューを行った。次に、擬態語を用いた振り返りシート(「擬態語チェックシート」:後述)への記入を求め、選択された擬態語および自由記述された言葉についてインタビューを行った。その際、「その言葉が制作された箱庭自体と関連しているか。関連しているとしたら制作された箱庭のどの辺りにそう感じられるか」、「その言葉の感じを自分自身で感

じられるか。感じられるとしたらそれはどのような感じか(身体の感じ、気持ちの感じ etc.)」などを主なポイントとして尋ねた。最後に、選択された擬態語および自由記述された言葉について調査協力者にグループ分けを行うよう求めた。その際、グループ分けの基準やグループの数は調査協力者自身が自由に決めてよい旨教示を行った。記入後、簡単なインタビューを行った。インタビューでのやりとりは調査協力者の了承を得て IC レコーダーで録音を行い、調査協力者の退室後、デジタルカメラで制作された箱庭の撮影を行った。

(3) 分析方法

箱庭制作後に行ったインタビューについて録音記録をもとに逐語録に起こし、擬態語チェックシート等の質問紙と合わせて分析のためのデータとした。

擬態語チェックシートについて、調査協力者ごとに選択された擬態語および自由記述された言葉がいくつあるかを数え比較するとともに、調査協力者全体で選択された擬態語および自由記述された言葉で多かったものから順に並べ、それぞれの擬態語や言葉について調査協力者全体としての分析を行った。

インタビューの逐語録および擬態語チェックシート等をもとに、各調査協力者ごとに擬態語(あるいは言葉)を通して箱庭制作過程における体験についていかに表現し、そこにどのような体験を込めているのか、個別の検討を行った。

上記の分析をもとに、箱庭制作過程における制作者の体験にアプローチする手法として本調査で用いた擬態語の意義や、本調査を通して見出された箱庭制作過程における制作者の体験の様相、さらには箱庭療法・心理療法過程やそのありようへの考察を行った。

4. 研究成果

(1) 箱庭制作過程における「制作者の体験」を捉えるための「擬態語」を用いた手法の開発について：擬態語(および擬音語)について、一般に広く認知され、多くの人が共通の意味として共有することができる形として通用しているものの収集を行ったところ、最終的に 1134 語の擬態語が収集された。収集された 1134 語の擬態語について、擬態語抽出のための予備調査を行ったところ、箱庭制作過程における「制作者の体験」を捉えるための「擬態語」として 95 語が抽出された。抽出された 95 語の擬態語を用いて、箱庭制作の振り返りを含めた予備調査を行ったところ、抽出された 95 語を選択式で回答を求める以外にも、自由記述式による回答を求め

ることにより、選択式による 95 語の擬態語が刺激ともなり、箱庭制作過程における「制作者の体験」にまつわるより幅広い回答が行われることが分かった。そこで、95 語の擬態語について選択式で回答を求めるシートとともに、自由記述による回答を求めるシートを合わせて、本研究における目的の一つである、擬態語を用いて「制作者の体験」にアプローチする独自の手法として「擬態語チェックシート」を作成した。(なお、95 語の擬態語を用いて行った箱庭制作の振り返りを含めた予備調査から、「擬態語チェックシート」への回答を行う際、制作者によって“作品に感じる感じ”について回答が行われる場合と、“制作中に感じられた感じ”について回答が行われる場合があることが明らかとなった。そこで本調査では、「擬態語チェックシート」への回答を求める際、“作品に感じる感じ”あるいは“作っている時の感じ”のどちらかを選んで、選んだ方について当てはまる言葉に丸をつけてください(擬態語選択シート) / “ぴったりする”言葉を自由に記述してください(自由記述シート)」という教示を行った。)

(2) 擬態語チェックシートから見出された調査協力者全体についての分析について：擬態語チェックシートによって箱庭制作過程の振り返りを行って得られたデータから、まず調査協力者全体について分析を行った。数多く選択あるいは自由記述された擬態語(擬態語以外も含む)は、上位から順に「ちょこん」, 「うずうず」, 「ゆらゆら」, 「わくわく」, 「そわそわ」, 「でん」(以下省略)であった。それぞれの語について、調査協力者とのインタビューの逐語録をもとに検討を行ったところ、同じ語であっても調査協力者によってその語によって表現しようとしているあるいはその語に込めている感覚や気持ちは異なり、またそうした感覚や気持ちが「制作している時に制作者自身が感じた感じ」であるか「制作している(あるいは制作された)箱庭の中に感じる感じ」であるかも調査協力者によって違いが見られた。こうした点について、さらに調査協力者ごとにインタビューを振り返り、そこから現われてくる事柄について検討を行ったところ、選び・砂箱の中に置かれたミニチュアの客観的な特徴を越えて、そのミニチュアが砂箱に置かれた様子や制作された箱庭全体の中でのそのミニチュアの意味づけなど、特定のミニチュアに対して制作者独自の重み付けが込められていることが窺われ、また制作者自身の感覚や気持ちとともに制作された箱庭の中にも制作者自身の感覚や気持ちとはまた異なる感覚や気持ちが込められ動いていることが示唆された。このように箱庭制作の過程においては、制作

している制作者自身が感じる身体感覚や気持ちといった内的な感覚と同時に、制作されていく箱庭の中にも感覚や気持ちを伴う世界が生み出されることで、その両者が絡み合いながら一つの箱庭として現われて来ることと考えられた。

(3)調査協力者個別の分析について：さらに、調査協力者一人一人について、擬態語チェックシートによる回答とインタビューの逐語録から分析を行った。そこからは、まず、箱庭制作過程における制作者の体験として、「ミニチュアを選ぶ」、「ミニチュアを置く」、「砂にふれる」といった箱庭制作過程の要素一つ一つにおける体験が抽出され、そうした体験のそれぞれが箱庭制作を通して一つの箱庭として結実していくことが明らかとなった。また、一見すると固定されているように見える制作された箱庭の中に、たとえば箱庭全体に漂う「空気感」のようなイメージや、箱庭に置かれた人物の「気持ち・心情の動き」、箱庭内に置かれたミニチュアの動き、制作された箱庭の中の雰囲気の流れといった、制作者自身の身体感覚も含めた「制作中の体験」とつながった動的な要素が込められ、制作者に感じられていることが見出された。こうした点は、まさに箱庭表現がイメージの表現であると考えられている一端を示すものであり、また箱庭理解にとって非常に重要な視点となるものと思われる。また、身体感覚に関しては、音(聴覚的と思われる)、夜(視覚的と思われる)、風が肌に当たる触感、砂の上にミニチュアを置く時の感触、箱庭内の雰囲気に対するなんとも言えない内的な感覚などというように、箱庭制作の過程において制作者自身が実際にミニチュアを選び・置く中で感じる感覚とともに、制作されていく(制作された)箱庭の中にも身体感覚的な要素が多く含まれていることが示唆された。箱庭療法は一般に砂を用いることで直接身体感覚に働き掛ける手法であるとされているが、身体感覚が関わってくるのは砂やミニチュアを通してだけでなく、制作している(制作された)箱庭の中のイメージを通してもそうした身体感覚が大きく関わっていることが窺われた。これは制作者の身体とともに、箱庭における身体性について考える上で重要なテーマとなるものと思われる。

(4)本研究で得られた成果の意義・位置づけについて：本研究を通じて、箱庭制作過程について制作者自身の体験、特に視覚のみならず触覚、聴覚などを含めた五感による身体感覚をベースとした「体験」にアプローチすることで、箱庭制作過程において制作者がいかなる体験をし、そうした体験が制作された箱庭とどのようにつながっているのかについ

て考える手掛かりとなったものと思われる。制作された箱庭を単に固定されたものと捉えるのではなく、そこにいかなる身体感覚やイメージの広がりといった「制作者の体験」が込められ、そうした体験といかに関連しつながっているのか、そうした観点からも箱庭を捉えることの重要性を示すものとなった。近年、箱庭療法に関する研究においては、箱庭制作過程において制作者の中でいかなる体験が起こっているのかをテーマとした研究が行われるようになってきている。本研究はそうしたテーマの一端として、身体感覚およびイメージの体験を手掛かりとしてアプローチしたものとなったと言えよう。

(5)今後の展望について：本研究において開発した擬態語を用いて箱庭療法過程における制作者の体験を捉える手法はまだまだ試作的なものであり、さらなる研究を通してより精緻なものにしていく必要があるものと思われる。また、そうした手法を開発する中で見出された「箱庭を作っている時に感じる感じ」と「制作された箱庭に感じる感じ」について、どちらかでしか答えられない、という調査協力者が多く見られた。この違いは一体どこから来ているのか、またそこには箱庭制作における体験のあり方として何かしらの違いがあるのだろうか。本研究ではそのあたりまで検討を行うことができなかった。今後のさらなる研究を通して、そうした点についても深めていきたいと考えている。本研究は、箱庭制作過程における「制作者の体験」がテーマであったが、箱庭制作あるいは箱庭療法のみならず、より広く心理療法そのものにおいても「来談者(クライアント)の体験」という視点は欠くことができないものである。今後もそうした視点あるいはテーマを踏まえ、本研究を発展させていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

和田竜太、箱庭制作における制作者の体験に関する一考察 - 擬態語を用いた箱庭作品の振り返りを通して -、京都大学カウンセリングセンター紀要、第37輯、p.31-48、2008、査読なし

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

なし

6．研究組織

(1)研究代表者

和田 竜太 (WADA RYUTA)

京都大学・カウンセリングセンター・講師

研究者番号：20402951

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし